

2 日本短角種の産肉能力（間接法）検定

1 背景と特徴

日本短角種の種雄牛（直検済）の子牛を同一飼養条件で肥育し、遺伝能力の優れた種雄牛の選択の資料とする。

2 技術の内容

山笹群：平均増体量は 2,513 kg、D. G. 0.816 kgで、1 kg増体に要したTDN量は 7.42 kgであった。

枝肉重量は 272 kgで、脂肪交雑は平均 0.6 で、枝肉格付は、中 2 頭、並 4 頭の判定となった。

外貌的所見では全体的にのびがなく、コンパクトにまとまった感じであったが、測定数値は各部位とも清春群と等しい値であった。肥育度 388 であった。

清春群：平均増体量 291 kg、D. G. 0.945 kgで、1 kg増体に要したTDN量は 6.65 kgであった。

枝肉重量は 284.2 kgで、脂肪交雑平均 1.2 で、枝肉格付は上 1 頭、中 4 頭、並 1 頭の判定となった。

外貌的所見では、のび、深み、背腰よく、充実していた。肥育度は 413 であった。

検定種雄牛の産肉能力等級は、山笹号「B⁻」、清春号「B⁺」の判定となる。

3 指導上の留意点

山笹群：増体量は個体間にバラツキが見られたが、脂肪交雑はバラツキが少なかった。

清春群：増体量は個体間のバラツキが少なかったが、脂肪交雑でバラツキが見られた。

4 試験成績の概要

- 1) 試験課題名 日本短角種の産肉能力（間接法）検定
- 2) 試験年次及び場所 昭和 47 ～ 岩手畜試
- 3) 方法 検定牛の概要

山笹 46.1.29 生、（本 405）父 山耕、母 ささひら

山形村産、岩泉町供用

清春 45.4.27生、(予岩280) 父 清城、母 はるひめ

山形村産、滝沢村供用

調査牛は上記種雄牛の産子各6頭を一群とし、日本短角種種雄牛選抜実施要領に定める事項について実施した。

4) 試験結果

直接検定のすんだ種雄牛の子牛を肥育し、遺伝能力の優れた種雄牛選定の資料を得た。

5) 主要成果の具体的データ

表-1 増体成績

種雄牛名	項目	開始時体重	終了時体重	増体量	1日平均増体量
山 笹	\bar{x}	237.0 kg	488.3 kg	251.3 kg	0.816 kg
	SD	15.5	40.8	34.2	0.111
	CV	6.5	8.4	13.6	13.6
清 春	\bar{x}	228.1	519.0	291.0	0.945
	SD	15.3	37.2	28.8	0.093
	CV	6.7	7.2	9.9	9.9

表-2 飼料摂取量および養分量

項目	飼料摂取量 kg			
	濃原飼料	牧乾草	ヘイキューブ	コンサイレージ
山 笹	1850.7	717.5	153.8	619.6
清 春	1890.3	808.1	150.6	617.4

項目	1 kg増体に要した飼料及び養分量						
	濃原飼料	牧乾草	ヘイキューブ	コンサイレージ	DCP	TDN	DM
山 笹	7.4	2.9	0.6	2.5	1.00	7.42	10.01
清 春	6.5	2.8	0.6	2.1	0.90	6.65	9.02

表-3 屠体成績および産肉能力等級

種雄牛名	項目	屠殺前体重	冷屠体重	枝肉歩留	ロース芯の面積	脂肪交雑	枝肉格付	能力等級
山 笹	\bar{x}	456.3 kg	272.0 kg	59.6	34.3 cm ²	0.6 0.4~0.8	中2 並4	B ⁻ 69点
	SD	37.3	24.0		4.3			
	CV	8.2	8.8		12.4			
清 春	\bar{x}	488.3	284.2	58.2	41.0	1.2 0.3~1.8	上1 中4 並1	B ⁺ 77点
	SD	33.5	221.9		2.7			
	CV	6.9	7.7		6.7			

6) 残された問題点

- ① 集合検定及び現場検定における関連事項の差異の検討
- ② 検定優良種雄牛の早期高度利用の検討
- ③ 複数混牧の排除と、血統明確化の促進

5 参考資料

昭和51年度 試験成績概要書 岩手畜試